あのハンカチは私のものだった

「梅雨になっちゃって、洗濯物も乾かないわ」

母は部屋の中で大きな音を立てながら濡れたシャツを伸ばし、それをハンガーにかけようとした。

「うん。洗濯物には、あまりよくない季節だよね」

娘はその隣で洗い終わったハンカチを控えめに整え、ピンチハンガーの隅の方に干す。

母は大きなため息を吐く。その隣で、娘は小さく肩を揺らした。

「まぁ、でも、昔の人は恵みの雨だったんだよね」

娘がそう呟くと母は手を止めた。

「……毎日やっていると、そうも言えないけどね」

途端に空気が凍るような気配がした。母の突き刺すような声が娘の口を噤ませる。何気ない一言のつもりだったが、その場においては配慮の欠けた発言であったようだ。

「……そうだよね」

娘はここで謝罪を付け足すことが賢明な判断でないことを、過去の経験から知っていた。ここで最適なのは別の話題を提供することだ。娘は話題を慎重に吟味する。

「学校は、上手くいっているのかしら。

母は、自分が大人気もなく素っ気ない態度を取り、八つ当たりをしてしまったことを少し後悔していた。どうやら話題を伺っていたのは娘だけではなかったようだ。娘は母の期限が治ったと、安心したように答える。

「もちろん、順調。英単語のテストも調子いいし。最近は、数学の小テストもうまくいってる」

そう、と冷たくもなく、優しくもない、中性な声で母は答えた。

いつだっただろうか。娘から友達関係の話を聞かなくなったのは。母は作業を続けながら考える。最近の娘は、学校の様子を聞いてもただ勉強の進捗を答えるだけで、他に何も答えてはくれない。母はどうしたものかと考える。籠の中から次々と洗濯物を掻っ攫っていく娘をちらりと覗く。いつの間に、こんなきれいに洗濯物を干すようになったのだろうか。いつから、風の通りを考えながら最も乾かしやすい配置に洗濯物を干すようになったのだろうか。母は娘の変化をただの微笑ましい成長と見ることが出来なかった。

「そう言えば、大学はどこに行くのかしら」

娘はピクリと肩を揺らす。

「〇〇大学と、△△大学、かな」

そのいずれもここからは通えない場所だった。そう、娘が設定したのだった。娘はこの

短時間の間にそれらしい理由をつけなければならないことを知っていた。おそらく次に来る質問は、

「ここらへんにも良い大学たくさんあるじゃない」

こういったものだからだ。娘はすらすらと答える。

「私の研究したい分野はそこにはないの。他に□□大学とかあったんだけど、そっちだとどうしても私の研究したい分野の権威的な先生はいらっしゃらなくて」

母は極めて流暢で理にかなった返答に違和感を覚える。娘は、こうもはっきりものを話す子だっただろうか。これも成長なのだろうか。夜遅くに疲れたような顔で帰ってくる娘を思い浮かべながら考える。娘は、そういえば部活で何をやっているのだろうか。娘は、なぜあんなに疲れた表情をしているのだろうか。

「最近、部活はどうなの」

「今日めっちゃ聞くね」

娘は困ったように笑う。実際、娘は返答に困っていた。全て真実を言えば、母にそれほど勉強に励んでいないことが露呈してしまう。これは家の方針に反することである。娘も、この部活の取り組む様が、勉強から逃げた際に行き場を失った熱を逃がすようなものであることを、ある程度同意していたために、他のカモフラージュよりも少しばかり心苦しいものであることを承知していた・

「最近は、程ほどにしているよ。受験近いし、そんな構っていられないっていうのが本音かな」

母は安心する。しかしそんな自分に、少し嫌気がさした。私が望んでいるのは、果たしてこのような学生生活なのか、本当に、この子は、そう思っているのだろうか。母は言いようのない違和感を心に抱えたまま、ただ乱暴に鰓を伸ばす。

怒涛の質問ラッシュに頭を使い、娘は疲れ果てていた。ひとまず乗り切ったであろうことを悟ると、ここから出来るだけ早く離脱しなければ、いつかボロが出るだろう。娘は手を動かした。

これは完璧な母と娘の会話である。心配性の母と心優しい娘。堅実で安定した生活を望む指向。母の教育は間違っていない。そう、母は思っているが、心の奥に引っかかっているものが取れない。

母は洗濯物が入った籠から皺になったハンカチを取り出し、それを広げる。

「これ、誰のだったかしら」

娘はそれをじっと見つめる。

「うーん、分からないな」

娘は申し訳なさそうに答える。小さく、ごめんなさい、と付け加えた。
「ううん。いいの。ハンカチなんて誰のだっていいもののね」
母はそれを乱暴に整えた後、一番手前側に干した。
「ありがとう。手伝ってくれて」
母は空になった洗濯物かごを持ち、洗濯機のある場所へと向かう。
「全然！　いつもありがとう」
娘は満面の笑みを浮かべる。
「じゃあ、勉強してくるね」
娘は自室で何のゲームをしよう考えながら返事をした。」
「うん、それじゃ、頑張ってね」
母の言葉に娘の心は、確かにチクリと痛んだが、それすらも、日常化してしまった彼女には無視される程度のものとなってしまった。
娘はふと外を見る。相変わらずの大雨にやはり気分が沈む。恵みの雨だなんて、ポジティブに変換した自分自身は、結局誰だったのだろう。娘は誰のかも分からないハンカチをちらりと見た後、自室に帰っていった。